

神話的時間と超越体験

鎌田 東一

京都造形芸術大学芸術学部教授。専門は宗教哲学・民俗学・神道学。極めて多彩な顔を持ち、全国の宗教的な聖なる場所のフィールドワークを行う一方、神道ソングライターとして作詞・作曲、演奏などの音楽活動も行う。最近の著作として、『霊的人間』『神道のスピリチュアリティ』（作品社）など多数ある。

場内真つ暗な中、法螺貝の音

この前お亡くなりになりました河合隼雄先生の御霊に対して、追悼の意を込めて吹かさせていただきました。「超越とはホラ吹きである」と河合隼雄先生が存命であれば言われるんじゃないかな。あるいは、こういう観点も必要かと思えます。「超越とは笑いである」という観点。

例えば、『古事記』の天の岩戸神話においては、真つ暗になつた世界を開いていくために、笑いがその導入になつた。新しい世界を転換し、外への入り口をつけたのは笑いだった。笑いは声です。声は響きです。音です。法螺貝のようなものは、一つの音によって、仏の世界か、神の世界か、魂の世界か、どこかへとつながっていく、旅していく。そのような媒体波動です。私は毎朝法螺貝を吹きながらそういうことを感

じます。「超越とはホラ吹きである」、というのは、あながち嘘ではないんですね。そこには何かあるわけです。

では「超越」を文字どおり見ていったら、どう言えるか。超越という字は「こえていく」と書きます。「超」も「越」も「こえる」です。では、仮に「超越」を文字どおり「こえていく」と考えると、何をこえていくのか。

その「何」には、二つあると思います。一つは自己をこえていく。もう一つは世界をこえていく。世界というのは一般的な抽象的な言い方ですが、自己、そして自己を構造化している世界ですね。それをこえていく。そのこえていく道で最初に注目したいのは「穴」です。どのようにして、その回路を開くか。一つは穴ですね。その事例として、まず『不思議の国のアリス』を考えてみたいと思います。

皆さんも『不思議の国のアリス』のお話はよくご存じだと思います。主人公の女の子がピンクのウサギを見つけて、そのウサギを追いかけていく。すると、穴に落ち込むわけですね。穴に落ち込んで、どんどん自分が知らないアナザーワールドに入っていく。それはアリスの体験したワンダーランドであった。そのワンダーランドの体験のプロセスは、ファンタジーとして詳しく表現され、子どもたちだけでなく、大人をもとても楽しませた。ディズニーでも映画化、アニメ化されています。

おそらくこの『不思議の国のアリス』の影響を受けていると思われる、同様のシチュエーションが、日本の人気アニメーション『となりのトトロ』に出てきます。『となりのトトロ』

では、最初に家族三人（父と二人の娘）が新しい土地へ引越す場面から始まります。引越した先で、二人の女の子のうち、小さいメイという四歳の女の子が庭で一人遊びをしています。そのとき不思議な小さい動物を目撃するわけです。そのトコトコトコと歩いている動物は、目を凝らすと見える、ちよつと目を離すと透明になって見えない、不思議な半透明の存在です。その不思議な動物を追いかけていきますと、森の中に入っていて、まるで貴船神社や鞍馬寺の山の道のような木の根道を通ります。そして巨大な楠に至ります。その巨大な楠の中に不思議な動物が入っていたので、それを追いかけていくと、そこにどんぐりがあった。

この導入はとてもよくできていて、どんぐりを探す、どんぐりの追跡がトトロの世界に入っていく一つのメタファーというか、インデックスというか、仕掛けになっているんですね。メイは手を伸ばしてどんぐりを取ろうとします。ひとつキラッと光ったのでそれに手を延ばすと、どんどんまっさかさまに落ちていく。落ちていった先は、巨大なトトロの洞の中だった。そして、不思議な動物の親玉トトロと出会うわけです。

これはある意味で日本人が神と呼ばれてきた存在と出会っていくことの、最も牧歌的で平和な、美しい表現であると思います。子どもはその不思議な動物について、お父さんから教えられます。「それは森のヌシなんだよ。でも、その森のヌシにいつでも会えるとは限らない。会えたおまえはとても運がよかったんだよ」。

このお父さんは、子どもの世界を壊すのではなく、褒めるのでもなく、たんたんとうまく子どもの世界に寄り添いながら、その膨らみ、そのつなぎを言葉によってつくり出すことができる、生み出すことができる、言葉の魔術師のようなお父さんです。そのときの女の子の目の表情を皆さん、機会があったらもう一度見ていただきたいです。お父さんに教えられたときに、この子どもが目をぱつと開いて、驚いているような、「そうか」とか「わかった」というのでもなく、何かを深く感じ取っている。ハツとしている。そういう場面が描かれています。僕はいつもその場面を見て、世の中のお父さんがそういう言葉掛けを子どもに対してきたら、子どもはグレたりしないだろうな、いろんな問題が起らないだろうな、と思います。言葉は本当に重要だと思います。

こういう神秘、不可思議、違った世界に入っていく入り口として、穴は一つの通路になっています。あるいは象徴的な回路になっています。神話にせよ、昔話にせよ、現代のさまざまな幻想文学にせよ、そういう仕掛けを持つということ、いったいどういう起源や蓄積があるのだろうか。人間にとつて穴の中に入るといふことは、いったいどういう意味があるのか。

もちろんそれは、出生してきたときのお母さんの胎内記憶のところから始まるわけですね。あるいは生命が海の中から陸に上がってきたときの記憶や経験から始まる。旧石器時代の洞窟のようなどころで毎日毎夜を過ごしていたときのこととか、縦穴式あるいは横穴式の家で住んでいたときのこと、

そういうのもろもろの経験が蓄積されていて、穴に入っていくときにパーツとよみがえってくる。そこでは、自分の世界が一つの穴でもあり、その穴からもう一つの世界へ抜け出していく。そういう穴を通して異次元世界ネットワークにつながっている。

一つ、皆さんがあまりご存じない事例を紹介したいと思います。一四世紀に『神道集』というテキストができてきます。これは天台宗系の安居院流に属する下野に住むお坊さんが、関東の天台宗、禅的な世界をベースにしてつくり上げたテキストだとされています。この『神道集』には、例えば熊野縁起のこととか、北野天神のこととか、いろいろな日本の神々の縁起観、神として祀られる由来が語られています。それが『古事記』や『日本書紀』に全くない実に奇想天外な物語ばかりなんです。その中に諏訪の神様の縁起が語られている。「諏訪縁起事」というテキストがあります。諏訪の神様になつていく主人公は甲賀三郎諏方（よしかた）といひます。甲賀三郎はもともと近江の国の甲賀の里の人で、ある日、愛する妻・春日姫を天狗にさらわれてしまいます。愛する春日姫を追いかけ、彼は穴の中に入っていきます。

それが楠の根本にある穴です。まさに「となりのトトロ」の世界と全く同じなんです。楠から入り込んで好賞国、好湛国、草微国とか、蛇飽国とか、七三もの人穴と七二の地底の国々を十三年半も経巡ります。そして、艱難辛苦のあげく、彼はやっと地上に出てくるんですが、出てきたときに蛇になつていた。もちろん誰も蛇の姿の甲賀三郎がわからない。

三郎が思案していると、一〇人ほどのお坊さんたちがなにやら話かけてくる。どうやら蛇である自分の姿を変えることができる呪文である。それは、「赤色赤光日出東方蛇身脱免」という呪文です。そこでその呪文をよく聞いて三度唱えたら人間の姿になつて外に現れ出ることができた。

その呪文を覚えてくれたお坊さんたちは、例えば白山権現（金沢にある白山比咩神社）、熊野権現、日吉大明神、その他富士浅間大菩薩などです。天照大神は入っていませんが、日本を代表するさまざまな神々がその中に組み込まれています。その神々が教えてくれた呪文によって人間に戻ることができた。そしてついに甲賀三郎諏方は、諏訪の明神の上社の神様となつて祀られ、妻の春日姫は下社の神様となつて祀られたというのです。

これは日本人にとつての異界とか、超越といったときに起こってくるメタモルフオーゼ（変身、変形）の物語で、もの狂い、もの憑きとも言えるような異様なものへ自分自身が変身する、転換することとつながっていると思います。全く違う異世界に行つて帰ってきたときに、同一性を持って帰ってくるのができるのか。向こう側へ行つてしまつたら、違つてきているのではないか。甲賀三郎の話の中には、それは蛇となつて表現されていると思うんですね。彼はある意味で深い深い人類の古層のこのか、あるいは日本文化の古層の世界を旅した。あるいは日本とはどこか別の、東南アジアだとか、オセアニアだとか、アメリカだとか、そういうところまで入り込んでいって、異世界を旅し、元の世界に戻つて

くる。戻ってきたときには昔の言葉遣いもよくわからなくなっている。そのような異界体験が、異界を訪れた者にどういう刻印を押ししているのか。それは、本日のテーマ「心理療法と超越」に深い関わりがあるところではないかと、宗教学研究をしてきた私から見ると考えられます。

しかし、それが具体的に一人ひとりのカウンセリングの中での問題解決につながるのか。私は臨床の経験を全く持っていませんし、そういうことはまだまだ考える時間や機会を持っていない状況なので、これから私の観点だけから、いくつか話を進めたいと思います。

『神道集』のようなものは、日本の本地垂迹説とか、神仏習合を背景にして出来上がってきたものです。超越には、一つは穴を下りていく、穴の中に落ちていくといった、下降的超越とでも言うものがあります。そしてもう一つの超越は、その対極である上昇的超越です。例えばムハンマドの「夜の旅」という物語の中に語られているように、彼が舞い上がって、天使によって神の世界へ連れていかれるとか、羽を持って空を飛んでいくとかの話です。日本であれば、天狗のように、あるいはヤマトタケルの白鳥のように空に飛んでいく、上昇していく。そういう物語系があると思います。

上昇的超越の物語と下降的超越の物語の超越は、今までと違う非日常的な世界、この世界に対して異世界的な、別次元的なところへ越えていく、踏み越えていくというものです。ですから、超越という言葉を、異世界を旅する物語的なシチュエーションで説明しているわけです。

それから、そのような上昇・下降を垂直的超越の物語群だとするならば、もう一つ考えられるのが水平的な物語群です。水平的な超越にどういうシンボルやメタファーが使われるかというところ、例えば橋を渡るというのがあります。あるいは先ほどの木村先生のお話の中にも出てきましたが、門をくぐるというパターンもあります。その門の外と内、鳥居のようなものもそうですし、宮殿の門のようなものもそうですが、そこを人が閉めると全然違うところにいた、そこから先はこちら側と違う世界であった、そういう水平的移動の門や橋が考えられます。また、それを運ぶものとして舟があります。舟は水平的に、ニライカナイという常世の国であるとか、母の国であるとか、海のかなたに渡っていきます。例えば龍宮城に行く浦島太郎や、海幸山幸の話があります。そのようなところで水平的超越の物語群が語られていると思います。

今は空間的な座標軸で垂直と水平ということを行いました。ここで神話的時間というときの一つの時間軸を考えてみたいと思います。私は、神話的時間の一つの特徴は、先ほどの横山先生の話にもありましたように、クロノジカルでないことが極めて重要だと思っています。つまり直線的に因果律的に流れているんじゃない。前のものがあって、後ろのものがあるわけじゃない。その前とか後ろとか前後左右といったところが同時に起こったり、また逆転したりするような、非常に混沌とした複雑な回路を持っているということですね。言ってみれば、ワープするとか。そのワープする世界を、日本仏教では「即」、それから「頓」「隣」という言葉で表した

と思います。

では、次に宗教的人物を何人が取り上げてみたいと思います。例えば空海は「即身成仏」を言いました。口に真言を唱え、心の中に仏菩薩のイメージを描き、印を組んで身口意の三業を一つの形をすることによって仏と一体になる三密加持さんみつかけしという方法論を見出した。仏と一体になることを加持と言います。それは、妖しげなおどろおどろしいことを呪術的に祈祷することではありません。照応 *correspondence* という関係が成立するのが加持であります。大日如来の仏光が水面に照らし出されて、映りながら一つに反射し合う関係です。その三密加持が現れることが即身です。その身に即して現れる。素早く、頓で。「頓で」という言葉も、河合犀雄先生だったら、「頓で」と「飛んで」をダジャレでつなげるでしょうが、私もつなげたいものです。即身成仏が一つですね。

それから、親鸞の場合だと、「横超」、つまり横飛び往生と言いますね。自力の世界は縦に飛ぶ。空海さんも、十住心論とかいろんな心の段階があつて、結局は自力修行で縦に垂直的に飛んで行く。でも、極楽浄土というか、阿弥陀如来の世界は自力的な計らいを全部捨てて、ポンと横飛びする。すべて計らいを捨てたところで、横から向こうのほうとこちら側とがぐつと一つに包み込まれていく、あるいは結ばれていく。そういう横飛びの救済が、親鸞の言った阿弥陀如来の極楽浄土への往生の考え方です。これは他力の本願だと彼は言います。

それから、一遍さんの場合は、さらにその超越は踊り念仏

に表されてくるんですが、踊り念仏の世界に没入しているときには、やはり集中的に深い念仏を唱えるということがなければならぬ。その念仏を唱える境地を歌にしています。最初作った歌は、「唱ふれば仏もわれもなかりけり 南無阿弥陀仏の声ばかりして」ところが、ある禅僧に、「喝！ そんなんじゃ駄目、弱い。不徹底じゃ！」と言われるんですね。「私は南無阿弥陀仏と一体化している」と本当に思っていたのに、「喝！ 足りない！」と言われて、一遍さんはどこが足りないかと考えて歌を詠み直します。「唱ふれば仏もわれもなかりけり 南無阿弥陀仏なむあみたぶつ」。ただ南無阿弥陀仏を重ねただけなんです。替えたのは「南無阿弥陀仏の」声ばかりして」というのを「なむあみたぶつ」と、今度は平仮名的にひらいて詠んだ。

そういうことによって何が表現し直されているのかというと、超越の深度、あるいは超越の強度といったものです。なんとも、かないまへーん、みたいな。言いたいことがわかるでしょうか。もうお好きにどうぞ。そこまでいつちゃつたら、もういいですよ、というような、そんなところへ「なむあみだぶつ」で行けるということ。つまり、それは対象化できない。資格や身分も関係ない。言葉もない。そのものになりきっているということです。

それから、私は最近世阿弥という人を、とにかくすごいと考えております。先ほど悲劇の話が出ましたが、日本が世界に誇ることのできる悲劇が申楽・能だと思っただけですね。その能の中に夢、「夢幻能」という形式ができてきます。諸国一見

のお坊さんが出てきて、お坊さんが各地に行ったときに、その土地で鎮まらぬ霊を呼び出していく。呼び出した霊に、自分の恨みつらみや悲しみを語らせて、その霊が自分自身を語り終えたときに、その怨霊、怨念が消えたのかどうかわからないけれども、そこから立ち去っていく。こういう構造の劇をつくることによって、彼は間違はなくその時代の鎮魂機能、カタルシスを生み出したと思います。

私は最初、法螺貝で始めましたが、最後は石で閉じたいと思います。本当は、私がこの石をどこでどういう因縁で拾ったかを、私自身の実人生のプロセスを一つの事例として聞いていただいて、その中で話をしようと思ったんですが、もう時間がありませんので私自身の体験のことは飛ばします。（詳しくは、拙著『霊的人間』の冒頭部をお読みください。）

この縄文時代からあった石笛が能管という能の笛につながってくるのです。能のあの不思議な掛け声の世界は、私からするとまさに超越の声です。あちら側とこちら側を行ったり来たりするような響き、開けたり閉じたりするような響きなんです。その響きの源流に当たるのが石笛で、縄文人が吹いていたものです。

では最後に、また電気を消していただいて、この笛をもって私の話を終わらせていただきます。

ふたたび暗闇の中に石笛の音

どうもありがとうございました。